

朝日新聞

2007年(平成19年)

10月22日

月曜日

夕刊



星野雄一さん

1回の派遣ごとに登録スタッフの給与から250円を徴収していた日雇い派遣の「フルキャスト」。

星野と正社員仲間、あわせて4人の未払いの残業代は数百万円に上った。星野たちは昨年10月、スタッフにも声をかけて労組を立ち上げた。すると、会社幹部が星野らに数千円の手切れ金。これで会社をやめる、というのだ。

委員長の星野雄一(27)は、スタッフを手配する側の正社員である。まずスタッフの待遇改善に取り組んだのは、通勤の途中、横浜駅近くでみた光景がきっかけだった。路上生活者と思われる男がゴミ箱をあさっていた。スタッフだった。「心が痛みました」。

4人で話し合った。「やっとな定給のふつうの会社に入れた。やめたくない」「社員自分たちだけ金もらってやめて、スタッフはいまのままでいいのか」。

もっとも、星野ら正社員の仕事のきつさも、並大抵ではない。あした何人派遣してくれ、という注文を午後3時まで受け、それからスタッフの都合と合わせていく。電話をかけているうちに終電に乗り遅れ、会社の床に寝泊りして仮眠する。

手切れ金を突っぱねた。労使交渉では、スタッフの有給休暇も認めさせた。今後は社員状況改善にも取り組む。

翌朝6時には、スタッフから出発前の連絡電話が100件ほど入る。急に行けなくなった人がいると、代わりに社員が派遣先で働くことも。星野は睡眠も食事もとれず、半年間で20キロ近くやせた。だが、星野はやめない。5年かけて手にした「固定給の正社員」を、手放したくないからだ。

紳士服大手「コナカ」の茨城県内の店で働く渡邊輝(26)は入社4年目。大学を卒業し、うまく1部上場企業の正社員になって喜んだ。だが、朝8時半から夜11時まで働く生活が待っていた。

星野は大学を2年で中退した。就職氷河期なので卒業しても就職できないといわれ、早く仕事をみつければいいと焦った。

上意下達の職場なので、モノを言うのは怖かった。でも、この働き方では長続きしない。会社の商品やサービスには誇りを持っている。できれば定年まで働きたい。

最初にみつけた仕事はリフォーム会社の営業。給料は完全歩合制、早朝から深夜まで飛び込みで家々をまわった。「頭がおかしくなりそう」で、半年でやめた。次も建築会社の営業だったが、今度は親会社につぶされた。

そして、就職情報誌で見つけたのが、フルキャストの子会社での仕事だった。正社員で固定給が魅

が書記長になって労組をつくる。全国の店から加入者が相次ぐ。中村忠久(30)が副委員長に。会社との交渉で、労働時間は守ら

若者の勇気が道ひらく



右から渡邊輝さん、笹川泰弘さん、中村忠久さん

れるようになった。

会社を優遇して労働規制をゆるめたことで、20、30代の彼らが一番くるしんでいる。派遣や契約社員など不安定な働き方ばかりが増え、運良く正社員になれたら、身を削ってがんばるしかない。

「ビデオプレス」代表の松原明(56)は国労闘争や君が代不起立など人々の闘いを、20年にわたってカメラに収めてきた。

松原は仲間とこの秋、労組をもつと使おうと「ユニオン・Yes!キャンペーン」を始めた。設けた動画投稿サイトに、若者の労組からPR映像が続々と集まっている。渡邊の労組の映像もある。

松原は思う。「若者たちは、厳しいのは自己責任だと思わされてきた。でも、疑問をもち、立ち上がった。社会が変わるかも」。



松原明さん

■23日から「ピアノが見た夢」シリーズが始まります。